

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	大 平 修 也
2. 審査委員	主 査：（上越教育大学教授） 松 本 健 義 副主査：（兵庫教育大学教授） 初 田 隆 委 員：（滋賀大学教授） 新 関 伸 也 委 員：（鳴門教育大学教授） 内 藤 隆 委 員：（上越教育大学准教授） 伊 藤 将 和
3. 論文題目	芸術的行為による他者との共感的対話を通した生活世界の生成に関する研究
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 大平修也 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和3年2月7日（日） 9時30分～11時20分 場 所：上越教育大学第2講義棟1階113講義室 (1). 学位論文の構成と概要 (a)学位論文の構成 本論文は、序章及び終章を含む、全5章で構成している。 序章 問題の所在及び目的と方法 第Ⅰ章 他者との対話を生成する芸術的行為 第Ⅱ章 共感的対話を生成する芸術的行為の節合の作用 第Ⅲ章 生活世界を生成する芸術的行為 終章 芸術的行為による他者との共感的対話を通した生活・社会・文化の生成 (b)学位論文の概要 序章では、研究の動機と意義、問題の所在、研究の目的、方法、構成、用語の定義をした。 第Ⅰ章では、芸術的行為の過程で子どもが対話する他者の位置づけと研究モデルの構成を行った。佐藤公治やミハイル・バフチンの「対話」、E. フッサールの「生活世界」の概念から研究の視点を設定し、以下の3つの参与観察事例を記述分析し考察した。①幼児が、展示作品を見ながら、他の幼児や保育士と語り合う活動を行った後に公園でドングリを拾い並べる造形活動を行った美術館での活動。②児童2名がカナヘビを飼育していた虫籠の中の環境をつくり変えた活動。③使われていなかった校内のビオトープをつくり変えた児童の活動。以上の分析考察を通して、芸術的行為の過程で相互作用する3つの「他者」を位置付けた。(1)もの(素材や造形物)、道具、活動の環境、(2)共に活動する他の人や生物、(3)ものともものがもつ意味との関係、及び人同士や人と生き物の相互作用的なふるまいや関係としての社会文化的構成物。以上の3つの他者と相互作用していく過程を共感的対話と位置付け、研究モデルを構成した。 第Ⅱ章では、現代アートのソーシャリー・エンゲイジド・アート(SEA)の視点から、事例分析を通した研究モデルの検証を行い、芸術的行為がもつ芸術としての作用を明らかにした。人の社会文化的な相互行為を創造するSEAに関連した現代アート、及び人の見方、感じ方、ふるまい方、表し方を変化させる経験を示す政治哲学者ラクラウ&ムフの「敵対性」概念と、2つの異なる要素の関係をつなげたり切り離したりする作用を示すカルチュラル・スタディのステュアート・ホルの「節合」概念を研究の視点とし、参与観察事例と授業開発実践を記述分析し考察した。①学生5名と児童1名が、流木などの漂流物を拾い組み合わせながら活動場所である海岸を協働でつくり変えていく演習。②直径5.5mの円形の紙に児童

21名が協働で描いていく大平の研究授業実践。①では、受講者がもの(素材や造形物)や他の受講者と相互作用していくパブロ・エルゲラ「社会的相互行為」の創造を含めたSEAに関連する現代芸術の11の性質や、SEAの特性である「敵対性」の作用により、互いの見方、感じ方、ふるまい方、表し方を共感的に味わう関係が、芸術的行為の過程で形成されることを相互行為の記述により明らかにした。②では、児童が制作過程で「生活世界」の一部として出会う他者の「敵対性」を経験しながら、自他を「節合」させて社会文化的な関係を形成していく芸術の作用が芸術的行為にあること相互行為の記述により示した。

第Ⅲ章では、他者との共感的対話を生成する芸術的行為の授業実践を行い、多様な人たちの「生活世界」を新たに生成することで、第Ⅰ章で設定した研究モデルを修正し、その検証を行った。個々の人を示す「有機体」と、人が経験する対象を示す「環界」とが相互作用していく「主体」の生成過程として、生物学者ヴァイツゼッカーの「ゲシュタルトクライス」視点から研究モデルを修正すると共に、以下の授業を芸術的行為として開発実践し、記述分析と考察を行った。①高校生8名、大学生1名、I 美術館の館長1名の計10名が、アルミ合金製の丸棒を金鋸で叩く造形行為を行った後、つくった造形物に触れながら、叩いた経験について語り合った筆者の授業実践。②I 美術館に展示した高校生ら10名の造形物を来館者が鑑賞した活動。事例の分析考察を通して、「有機体」としての子どもと、「環界」としての他者とが出会う共感的対話の過程には、子どもが周囲の人と共にもの(素材や造形物)をつくり変えていきながら、もの(素材や造形物)に関わる身体経験を通じた地域の人々とのつながりを新たな生活、社会、文化として形成していく作用があることを明らかにした。これにより、研究モデルを検証した。

終章では、研究成果をまとめ、本研究方法の教育実践学研究への貢献と研究の課題を示した。芸術的行為において、他者(もの(素材や造形物)、他の人や生物、社会文化的構成物)と共に協働する子どもたちは、行為の過程で味わう身体経験を相互に共有し、その身体経験に基づいた個々のふるまいや表し方や造形物を自らのよさとして見付けたりつくり出したりしながら、互いのよさを個々のかけがえのなさとして味わい共感する見方や感じ方を獲得していった。こうして形成された共感的関係は、本研究において、子どもと大人が学び合う、新たな生活、社会、文化として実践されたことを示した。

(2) 審査経過

(a) 独創性

①学校での図画工作科と総合的な学習の時間とが連環するプロジェクト型の複合的学習活動における協働的芸術活動の事例分析から、芸術的行為の共感的対話モデルを作成した。ソーシャリー・エンゲージド・アート(SEA)に関連した現代美術の特性から析出した観点に基づき、協働的芸術活動が社会的相互行為を生成する過程に着目して事例の記述分析を行い、研究モデルの検証を行った。検証結果から生活世界と芸術世界とをつなぐ芸術行為による他者との共感的対話モデルをゲシュタルトクライスの観点で再構成し、その検証実践と事例分析により、理論、モデル、実践の論理的一貫性を実現した。

②芸術行為を通じた共感的対話の成立契機として、ソーシャリー・エンゲージド・アートにおける行為者のアイデンティティを揺さぶる「敵対性」概念に着目し、「敵対性」との出会いを生活世界と芸術行為とをつなぐ芸術活動特有の表現や鑑賞の在り方と位置づけ、芸術行為により敵対性を解消して生活世界を生成する過程で、共感的で社会的なアイデンティティが創造されていく過程を、カルチュラル・スタディの「節合」概念により位置付けた。これにより、多様化と分断が進む現代社会において、芸術活動とその経験がもつ共感的で民主的な社会形成の働きを提示した。

(b) 教育実践学研究への貢献

本研究は、幼児、小学生、高校生、学生、美術館での表現や鑑賞の芸術的行為について、活動過程で出会う敵対性と、節合により生成される社会文化的構成物や生活世界との関係から、相互行為分析の方法を用いて分析することで研究モデルを立ち上げ、その検証のためさらに実践を展開する円環運動的な研究と実践の輪を、研究行程としている。学校教育における芸術行為の実践過程の特性に基づいた、教育実践学研究のプロセスの1つを、検証的に提示した研究である。

(c) 発展性

①教室や学校から、地域、美術館へと拡張する芸術教育のプロジェクト型教育実践の価値づけがなされ、今後の研究の発展が期待される。

②世界の民主主義の危機、人間の共感と結びつきが揺らぐ今日の社会状況において、子どもたちの造形活動を社会文化的実践として意義づけたことは、芸術教育を通じた社会形成の可能性に示唆を与えた。

③近代的世界観が脅かす自分にふさわしい居場所を、芸術行為を通して見つけ、社会的に生成していく過程を提示したことは、本研究の意義と可能性である。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 大平 修也 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。